

ゲーム制作部

漆黒の小説家

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少し特殊な体質をした主人公藤霊、彼はゲーム制作部が火事を起こした現場に立ち会わせてしまう。

このカオスすぎる部活、彼はどうするのか

目次

何、このカオスすぎる部活、おもしれ	1
カオスすぎる部活、ゲーム制作部	7

何、このカオスすぎる部活、おもしれ

皆さん、初めまして。僕の名前は間藤^{まどうれい}霊です。

僕は世間で言う、厨二病と言われる奴なのです。まあそんな事はどうでも良いけど

そして僕は生まれつき髪の色が真っ白だったのです。

そして瞳の色は真っ赤、いわゆるアルビノって病気ですね。

だから普段は黒いカラーコンタクトを付けているんですが、白い髪の毛のでよく不良と間違われます。

そして、僕が好きな事は面白い事、例えばゲームやラノベ、あとは面白い事と言ったら、祭りや学校行事

そんな感じの事が大好きなのです。

正直五月蠅いのは嫌いなんですが、なんかそういう時はテンションが上がったりするし

それと、僕は多重人格という病気なのです。

それは、昔起きたことが主な原因なんですが、そこはまあ置いといて、だからこの作品を読む場合

僕は、人格が変わったりするので、突然おかしくなったりするのは、気にしないでください。

ちなみに、普通の時の口調は、僕や敬語を使います。

もう一人の時は、俺や、年上の先輩に対しても上から目線になります。

まあもう一個の人格の所為で周りから不良って思われることもあるんですけど

それと、僕は府上学園の二年生です。

まあ僕の自己紹介はそんなもんですかね、ああ間違わないでくださいよ、僕は決して不良ではないですよ

ちゃんと授業は受けてるし、成績もいい、だから不良じゃないよ、それでは、ほんぺんすたーと

僕は今、廊下を歩いている。

目の前には、風間一派と言われている不良グループが居ます。

「ああ、風間君、おはよ」

「あん、間藤かああおはよう」

「長山君と横島君もおはよう」

「おう」

さて皆さん、なぜ不良と僕がこんなに仲が良いかって、それはまあ、僕の容姿の所為かな

みんなが僕の事最初は不良だと思ってたみたいで、そんなときに風間君たちが僕に勝負してきたんだよね

そのときに体質や、病気の事とか言ったら色々あって仲良くなった。

それと、もう一人いるよ、ここでは紹介しないけど

「授業さぼろうぜ」

横島君が風間君に向けてそう言っている。

「そうだな、そうだ間藤もどうだ」

「うーん、僕は良いよ、また不良と間違われるし」

「そうか、そんじゃさぼるか」

「頑張ってるねー」

「いやいや、頑張れっておかしいだろっ」

「今日もナイスツツコミ、じゃあね風間君」

僕はそう言って、教室に向かった。

その後の事はスキップします。

そして時は放課後

廊下で、風間君たちに会った。

「ほんとに全部サボっちゃったね、今度小テストあるって言ってたから、ノート貸してあげるね」

「マジか、助かるわ」

「いつもありがとうね、レイちゃん」

「すまん、助かる」

「良いよ、これくらい・・・ねえ、あれ見て」

「ああ・・・火事だああああ」

すると風間君は、すぐに煙が出ていた教室に入って行った。

『なんか、面白そう、僕もいこ』

「大丈夫か」

「・・・あつ」

「なにやってんだ」

「イ、イエ、この火はイリユージュオンですよ」

『プフツ、なんだよその誤魔化し面白すぎだろ』

「めっちゃ、熱いぞキツイなその言い訳」

「ナイスツツコミ、それとその先輩ナイスボケでした」

「あざーす」

「いや、何言ってるの」

「またナイスツツコミ」

「ああ、そんな事言ってる場合じゃねーだろ」

「ケンちゃん、消火器」

すると長山君が風間君に手に持っていた消火器を渡した。

「お前らそこどけ、よーし消えろ・・・」

「「「やったーきえたー」」」

「よくぞあのイリユージュオン火事を」

「プフツ」

「今、火事つつったな」

「はっ」

『嫌だから何その言い訳、面白すぎ、それに今日はいつにもまして風間君のツツコミが面白い』

「しかし、何で部室なんかで火事が」

目の前を見ると、なんと花火が散らばっていた。

すると突然後ろからビリビリビリと言う音が聞こえた。

そこには横島君が先生にスタンガンで気絶させられている状況が目に入った。

その横では長山君が窒息死させられそうになっていた。

僕はこの状況が面白かったため、急いでRPGなどである、隠密スキルを発動させた。

その状況を見た風間君は

「横島ああああああ・・・長山ああああああ」

「お前ら何のつもりだ」

「私雷属性」「私、水属性だから」

『ははは、ヤバい腹よじれる、面白すぎ』

「今回の事は、外には知られてはならない」

「君らには、記憶をなくしてもらおうよ」

「あなたも、炎属性である私によって、記憶を消されるのです」

「炎属性、何言ってるんだ、そう言うのは間藤の方が・・・っておいあ

いっどこ行きやがった」

「属性、それは誰しもがつかさどる属性エレメントなのです」

「ねえよ、そんなもん現実に」

「ナイスツツコミ、風間君」

「その声、おい間藤どこ行きやがった」

「ここだよ」

「ここってどこだよ」

「ここここ、上だつてば」

「上だあ、つてなんで天井に張り付いてんだよ」

「うーん、ノリと勢い？」

「なんで疑問形なんだよ」

すると、後ろから水属性さんと、雷属性さんが風間君を水ロックと雷ロックで捕まえた。

すると炎属性さんが、怪しげな雰囲気を纏いながら風間君の方に近づき、燃えた、間違えた萌えた

でもそんなもの、風間君に効くわけなく、そのまま消沈した。面白いな

そして、また風間君の後ろにいた人、今度は土属性らしい人が全力で風間君を殴った。

「そのどこが土属性なんだよ」

「私はさつきまで、砂場で遊んでいた。そして手を洗っていない」

「汚ええ、手洗えよ」

「先輩、流石に手は洗った方がいいですよ、先輩綺麗なんですから、そう言うところちゃんとしなないと」

「そうか、でも私には譲られないものがそこにある」

「仕方ない、僕も反撃しますか」

僕はそう言うのと、風間君を後ろに來させて、守るようにして下に降りた。

「ここには、中々の属性の力を持つ人がいるようだ」

「お前に勝てるのか」

「おい、間藤俺の事は良いから逃げろ」

「馬鹿言うな、ダチ置いて逃げるほど、俺は腐ってねーよ」

「間藤……お前」

「見せてやろう、僕、否、我の力を、貴様らみたいに我は属性を持たない」

「なら、勝てるのか」

『おつ、ノリ良いね土属性さん』

「しかし、我には、属性の代わりに授けられた力を見せてやろう」

僕はそつと、右目を隠すようにしながら黒いカラーコンタクトを取った。

すると真つ赤な僕の目が現れた。

「ハハハハハ、これが我の魔眼魔神の停止眼だ」タイム・ストップ・バロール

「この右目には、神話で有名な魔神バロールの力が宿っているんだ今のうちに、風間は長山と横島を連れて逃げろ、早く我がこの力に呑まれる前に」

「ああ、なんか良く分からんが分かった」

そう言い残し、風間君は二人を担いで逃げ出した。

そこから、僕はルルーシュのように右目を手で隠すようにし、セリ

フを言った。

「さあ、新たなる戦いの初戦の最後を始めよう」

『決まった、それじゃおふぎけもここまでにして』

「いやあ、皆さんノリ良いですね」

「それよりどうするんだ、お友達は逃げたけど」

「ああ、風間君なら、皆さんの好きなようにしてください、ああ勿論僕はここから逃げたりしませんし

こんな面白い部見たことなかったんで、ちよつとノリと勢いに任せただけなんで」

「そうか、なら私は砂を取ってくる」

その後、しばらくすると、風間君が頭に袋をかぶせられてここに来た。

ニヤリ、僕は自分でも悪い顔してるなって思うくらいの顔をした。

周りには、ドン引きしてるが

「ヒヤー、ここ何処、誰かあ、殺される」

僕はドアを閉めた。(静かに)

そして、風間君の近くで、叫ぶ

「があああああ、(鞭のような物を叩きつけるパチンと音がした)があああ、クソ、油断しちゃった。

な、なんだその手に持つてるのは、だめ、それ絶対ダメ、人間としてだめ、がああああああああああああ

「な、何が起きてるんだあああ、間藤、大丈夫か」

『ニヤリ、ヤベ、メツチャおもしろい』

それを見た周り

『うわ、可愛い顔してえげつない』と思っている。

カオスすぎる部活、ゲーム制作部

「やだ、だーれかー、暗いよ」

風間君は、ずっと叫んでいる。その横で先生はスタンガンを持ってスイッチを入れる。

風間君の後ろでは、土属性さんが、シャドーボクシングの様な事をしている。

そして、その隣では、水属性さんがペットボトルを振って耳元で水の音をさせている。

僕は、このカオスすぎる状況をニヤニヤしながら見ていた。

「さあ、どうしますか、この部に入りますか」

「はいるうううう、入らせてください」

「歓迎します」

炎属性さんが、ものっすごい、顔をしながら影を纏っている。

あれ、炎じゃなくて闇だね、絶対

「改めて、部長の柴咲芦花です。あなた達二人はこの部に歓迎します」

「私は烏山千歳、二年だ」

『あれ、同じ年、大人っぽいから年上かと思ってたのに、って事は柴咲さんも同じ年か』

「水上桜、一年だよ」

水属性さんが次は自己紹介する。

そして、風間君は・・・

「うんなこと、どうでも良いから早く外せこれ」

まだ袋を被ったままだった。

僕はその隣で鞆に入れてた茶葉を取り出し、紙コップに入れて、これまた鞆に入れてたポットのお湯を注いで

お茶を飲みながら、座っていた。

「ズゥー、はあ美味し」

「なに、飲んでるんですか」と、水上さんがこつちに来た。

「緑茶だよ、皆さんにも淹れますね」

そう言って、全員の分を淹れて渡した。

「あ、ありがとうございます」

「おつ、サンキュー」

「ありがとうございます、先輩」

「助かる、のどが渴いてたんだ」

「風間君も、飲みなよ」

僕は、少しぬるめにしたお茶を風間君の袋の中に流し込んだ

「ウゴ、ゴバババ、バフツ、し、死ぬ」

「二つ聞いて良いか」

「なんですか、コーヒーの方が良かったですか、紅茶もありますよ、
アールグレイティーに、レモンティー

ミルクティーもありますよ、もしかして、緑茶より、麦茶や、ウー
ロン茶の方が良かったですか」

鳥山さんの、質問に焦っていた。

「いや、そうじゃなくてダナ、何で鞆からそんなもんが出てくるんだ
よ、家電だろそれ」

「うーん、何ででしょうね」

「はあ、まあいい」

「それで、お前はちゃんと聞いているの、やだ、何で私の足に頼りし
てるの、足フエチ」

「してねーよ、てかいい加減これ外せ」
すると、柴咲さんが袋を外した。

「ゲホツ、ゲホツ、おぼれるかと思った」

「自己紹介は、聞いた通りだ、足フエチ」

「待て、何おかしな属性定着させようとしてるんだ」
「お前んお自己紹介聞いてないから、まあどうでも良い」

「良いんだ」

「良いから、この入部届に名前をかけ」

「わったよ」

風間君は、素直に入部届に名前を書いた。

「それと、お前も」

「はい、これに書けばいいんだね」

僕は素早く書いて、烏山さんに渡した。

風間君はきつと、これが先生の手に渡る前に取り返そうとしてるんだらうけど。

でも残念、この部の顧問は目の前のジャージを着てる人なんだよね。

すると、風間君も書き終わったみたいで、渡した。

それを受け取った烏山さんは、先生に僕のと一緒に渡した。

「えっ……って、待てゴラ、えっ何先公、お前先公なの」

「ゲーム制作部顧問、大沢南だ……よろしくう」

すると、風間君は先生の前まで行って、僕のと一緒に入部届を奪い取った。

僕はその瞬間、隠密スキルを最大限活用して入部届を違う紙とすり替えた。

さて、これに気付いたらどうなるかな

そして、風間君は逃亡した。

みんなは、追いかけて行った。

「先生」

「なんだあ」

「お茶のお替りいりますか」

「うーん、貰う」

「はい、どうぞ、熱いですから気を付けてください、それとお茶請けもどうぞ」

「おう、ありがとう」

ズズーと先生はお茶を飲む。

「それじゃ僕も追いかけてきますね」

「あんま、暴れんなよ」

「分かってますよ、それより校内でスタンガン使う先生の方がどうかと思っただけですけど」

「気にすんな、教師権限でどうにでもなるから」
「さいですか」

そして、教室から出た僕は色々校舎を探していると、落ちそうになっっている風間君を見つけた。

でもそれを、柴咲さんや、水上さん、烏山さんが引き上げた。

風間君は、手に持っていた入部届（偽）を渡した。

「ようこそゲーム制作部へ……ってこれ偽物じゃないですか」

「はああ、ってマジだ、おいどうなってんだ」

「すみません、感動の場面っぽいんですけど、本物はこっちですよ」

僕は手に持っていた、入部届（モノホン）を見せた。

「なああ、何で持ってたんだよ」

「いやあ、さつき風間君が先生から奪った瞬間、隠密スキルを最大限使って、入れ替えたんですよ」

「はああああ」

「って事で、部長これ入部届です。それと、二年B組 間藤霊です。よろしく願います」

「はい、今度こそようこそゲーム制作部へ」

ってまあ、こんな感じで終わったんだけど、いきなり部長の顔が怖くなった

「それより、私が折角体を張って助けたのに」

袋を手に出してこっちにかぶせてきた。

一瞬の出来事だったせいで逃げられなかったが、ここは必殺を使おう

「ザ・ワールド、時よ止まれ」

僕はスタンドを使って、逃げ出す。

なぜ使えるかって、そこはほら何でもありって事で、気にしない

ついでに言えば、アンリミテッド・ブレイドワークス、ゲート・オブ・パビロン無限の剣製や王の財宝

とかも使えるよ、まあそれはこれから使うとして

袋から脱出した僕はあのセリフを言う

「無駄……そして時は動き出す」

「「「……へっ」」」

「いやあ、やられましたよ、流石ですね部長」

「おい、何で逃げ出せてんだよ」

「ナイスツツコミ」

「お前、芦花の袋攻撃を逃げ出すなんて、どうやった」

「時を止めました」

「はあああああ、ありえねえ」

「そんじゃ、見せて進ぜよう」

「ザ・ワールド、時よ止まれ」

僕は急いで、ポケットの名前ペンを取り出し、風間君のおでこに足フェチって書いた。

「そして時は動き出す」

「おい、何にも変わってねーぞ」

風間君が、みんなの方を振り向くと全員笑った。

否、大爆笑した。

「えっ、何で笑ってんの、俺なんかおかしい」

「なんも、おかしくないよ、いつもと一緒だよ、それより風間君一緒に帰ろうと言いたいけど、先に帰っというて、僕はちよつと用事があるから」

「ああ、なんか分からねーけど、じゃあなまた明日」

「うん、また明日」ニヤリと後ろを向きながらみんなの方を見た。

風間君はそのまま帰った。

おでこに足フェチと残しながら、僕は風間君が見えなくなった瞬間笑った。

「ハハハハハ、はあ、ヤバい腹よじれそう。ブフツ、ククククク」

「お前、えげつねーことしやがるな」

「なんの事、僕は何もしてないけど」

「うわっ、あいつは足フェチでお前はドSかよ」

「そんなことないってば、僕はねおでこに足フェチって書かれたまま帰る不良が居たら面白いだろうなって
思っただけだよ」

「「うわあ」」

「そう言う事なんで、明日からよろしくお願いしますよ、部長」

「はい、でも出来るだけああいふことは控えてくださいね」

「善処します。つてもまあ女性にはあんな事しないんで安心してください」

「なんだ、お前、そんなことしてもモテないぞ」

「いえ、違いますよ・・・一回双子の姉貴にしてみたんですよ、どうなったと思いますか」

「どうなったんだ」

「爪全部はがされて、風呂掃除させられました」

「「うわあ」」

「まあ、近いうちに皆さんも会うと思いますよ、魔王姉貴に」

「それじゃ、僕帰りますんで」

「そう言い残し僕は帰った。」

柴咲芦花、 烏山千歳、 水上桜、 サイド

「なんか、ヤバい奴入部させちまったな、芦花」

「まあ、大丈夫でしょう。DSですけど」

「私、初めてDSな人見ましたよ」

「でも、家庭的だったよな」

「そうですね、というよりどうやって書いたんでしょ」

「やっぱり、あれですよスタンド」

「そんなわけねーだろ、まずありえねー」

「こんな感じの会話をしていたそうです。」